

黙行道

納 富 貞 雄

是で全々稿を改める事三次。此が發行される頃には又目も呉れなく無い様になつて居るかもしれぬ。だが然し是を以て無責任に出鱈目を書いて居ると速断されては困る。少なくとも僕としては渾身の心血を注いで居る。一昨夜も床には入つたが曉まで一瞬も眠る事は出来なかつた。

論理をたてゝ飛躍を無くしようとするならば、尙多くの駄言を費さねばならぬだろう。だが僕には一般としての批評はどうでもいゝ。僕は唯次の事を断言すれば足りる。神の前にも、鬼の前にも僕に何等異なる處なく言ひきる丈の確信はある事を。

論理前の問題―知識の成立―善の本質―至善の内容と形式―附英雄論―實在―悲願と峻嚴

科學は明白に二分さる可きものである。其一は數學、物理、化學、論理等の如く其の研究對象に於て、直接、全々、人間の意識活動を其の考察範圍に導入せざる科學である。此の種の科學に於ては演繹と歸納の二推理で事足りる。何故なれば前提とする事實は其自身盡く眞實だからである。然して此の際注意して置かねばならぬ二つの事がある(一)眞實は個々の事實及其論理過程にある事。(二)歸納に依りて構成された法則、假定等は假令、如何に眞實に近くとも依然として蓋然性の域を脱せぬ事。

其二は歴史、法律、經濟等の如く其の研究對象に於て必然人間の性情、意識行爲を其の考察範圍に導入す可き善の學科である此の種の科學に於て單に表面に露はれたる事實のみを基礎として論理を進めてはならぬ。事實をして事實たらしめた其の物を反省せねばならぬ。換言すれば善の問題を導入せねばならぬ。此の際前提の無反省、無考察の上に立てる論理は空理であり、空論である。砂上の樓閣に過ぎぬ。

善の問題を論ずるに先ちて先ず、知識の成立に就て反省する必要がある。

吾人が同情する場合、對象の苦しめる條件と自己自身が體驗せし夫れとが接近して居れば居る程、同情は濃厚になつて行く。かくて對象が如何に苦しんで居ようとも、事實自身に體驗した事の無い者は眞の同情をする事は出來ぬ。朔風吹き荒ぶ北陸に住む人が、雪に惱やめる思を、暖風薫る南國人が雪を戀ふ心を以て、爪の垢程も同情する事は出來まい。同情するとしたら、單に悩むといふ他の感情移入に依りてゝある。

知識の場合に於ても正しく然りである。一年前に讀んで感得された知識と、今讀む時に於ける夫れとの間に慥かに何等かの相違を見るであらう。事實ヒマラヤに登つて始めてヒマラヤを知る事が出來る。地圖や寫眞に依つて得たものは單なる概念に過ぎぬ。こゝに我等は單なる概念と知識とを區別する必要がある。知識は自己内部に於て全体として統一され且其の基礎に於て具象如實として認識されて居らねばならぬ。單なる概念は其自身必ずしも全体として統一される事を要求しない。各個獨立して統一体系を構成して居てもよい。即、自己自身と渾然一体たらずとも、或は全々自己とは獨立して思惟され、認識されても概念とは言へる。其の基礎は薄弱なる類比推理に立脚し、或は單に循環論法的に定義されて居ても概念とはいへる。知識は相對的には必然概念を伴なう。だが、全一概念の概念内容(知識)は各人に依つて各時に依つて違ふ。夫れは各人、各時に依つて體驗に深淺、廣狹の相違があるからである。然り。體驗の深刻化は知識の充實化である。

近代人は概念はよく知つて居る。理知には長けて居る。だが體驗は淺い！よく理窟は言ふが行はふ事を知らぬ。慥かに晩近、

叢生した、理知と概念とを以て事足りる、自然科学に毒されて居るからだ。第一科學に於ては概念丈で充分だろう。だが一步、人生の問題には入つては内容(体識)なき概念は全々空虚である。腑抜け者揃ひの近代は概念をさへ積込んで置けば有難がる。かくて世の中から、甘やかされた、才子どもは益々夢中になつて空虚なる概念をつめ込む。糞の役にも立たぬ閑愚ばかり聞かはして居る。一体何の事だ！暫時、本を擲つて黙つて自然の大氣を吸うがよい。無學、無言の田夫野人の中に如何に多く、尊む可き人間が慥かに埋れいる事か！

重ねて言ふ。體驗の深刻化は知識の充實化である。

道德の本質論に入る。

主觀に獨立した客觀規矩に従つて行動せねばならぬといふ觀念を、先ず最初に徹底的に放棄せねばならぬ。人間をしてそんなものを想定させる動機は僕は二つあると思ふ。(一)他人からの毀譽に心を動かされるから。(二)人間から私心や、主觀的誓約やは永久に取去る事が出来ぬ位に思ひ、我と我自身を卑下し、徒らに聖と善とを客觀界に求めようとする爲と。

僕は此處で斷言する。純粹の客觀妥當性は主觀の奥に内在すると。此の奥に内在するものを、儒教では至善といふ。陽明子は良知といふ。而してそは、時の古今と洋の東西を問はず全々全一なるものである。善惡の評價は正しく此の良知から出ず可きである。客觀規矩は此の主觀から派生されたものに過ぎぬ。法律でいふ時効の如きものに過ぎぬ。人を射んとすれば、其の馬を斃さねばならぬ。客觀妥當の善を得んとすれば、先ず吾が良知を休得せねばならぬ。道を休得せねばならぬ。良知の如何なるものなるかは、自身、三省して見ればわかる。

水は何處にでもある。だが唯あるのではない。何等かの形をしてある。良知も、道も、正しく此の如きものである。良知は萬古に不易である。だが其が存在は各現實我を通じて實在する。現實我、夫れは畢竟、良知、即、道の實現形式を見てのみ價値あ

るものである。總じて、内容は形式を通じて存在する。而して内容なき形式は空虚である。それは宛も概念規定に於ける内容と概念との關係に同じである。現實我は其が内容たる良知、道を忘却し去つたら正しく生ける屍に過ぎぬ。現實我、特に個体我を分析して幾十かの原素に分類し、畢竟人間は此等諸原素の保持者に過ぎぬ、と言つたり。かくて遂には、人間は性、食兩慾を少しでも完全に充たす可く努力す可きものだ。等と己れ恥も知りあがらんで言ふ奴等には僕は一言も交はしたくない。餓鬼の様に慾ばかり張る奴等は見る事も厭だ。此頃の社會に時めいて居る奴どもは、どれもこれも、恥知らずばかり。口に丈はいふ事を言つて居るが、内心は正しく上達の二つ。それに、かてゝ加へて空虚なる名望の慾。かくて日本は、地上の人類は日に日に暗黒の世界に引づり下ろされて行く。

現實我、夫れは止しく良知に依つて、光輝あり、生命ある。誰しもが體現す可きものは、是此の道だ。内に正しき道を踏み、天下、清食を求めて得なく、天下、清庵を探して得なくんば、海邊、松の葉かげに、青天でも仰いで、笑ふて、死ねばよいぢやないか。

だが、此處に呉々も注意す可き一事がある。道の實現を、よりよく、可能ならしめんが爲には、現實條件、現實環境は何等顧慮する事なく斷乎として變更し、改造し、革命されねばならぬ。そして、それは正しく、社會一般、國家一般に於ても然る可き事であらねばならぬ。

抑々國家の唯一無二の本質的職能は、民をして、等しく、其の戸に安ぜしめ、其の道を樂しましめるにある。そして、個我も亦夫れが現實性を徹底せしめて行く時、必然純然たる國民我として存在するものである。行きつまつた世に、維新をやる位の仕事が、何珍らしい事か。だが其の維新は徹底して、維新であらねばならぬ。革命の爲の、革命は糞の役にもたゝぬ。否、寧ろ毒だ佛蘭西革命を想ひ起すがよい。——此の國家に關しての問題は、最初、現實我の擴充篇として、稿を改めて、既往に於ける國家哲學の批判から始めて、社會と國家との相違、國家の三大職能、國家の評価、既往日本自身の反省、國際問題の指針、そして斷乎たる改革の要、所謂近代國家の解剖と歸結、かくて、最後に刻下に於ける吾が國情の省察、未曾有の難局は實に眼前に迫つて

居る所以、地上人類が、眞個の、曙光か、果た滅落かの第一日目は刻々に近づきつゝある事。そして如何に、吾人の責任と使命が重大なるか、に就きて、雷聲する積だつた。だが色々の點より、尙、暫時、淵默の可なるを知つた。若し諸卿にして、話を交はしたい方があらば、失禮ながら、山の本部に来て貰ひたい。(昨年例に依ると、尙暫時、時はあると思ふ)、だが、若し、萬一、訪者の中に、履む可き、吾人の道が、唯一無二なる事に徹底するに於ても、尙且、事實に於て僕等と生死を共にする底の人でない者が、あつたならば、其の人とは始から、御相手になる事は出来ません。不肖の子には一言半句、駄言、閑論をなす餘裕はありません——

カライルも言へる如く、英雄の最も本質とす可きは、一の誠實である。誠實がない人に英雄なんか、と言ふのは以ての外的事だ。誠實とは自己の良知を致す事である。良心に忠實なる事である。萬人がなす可きは、己れ聖人となり、英雄となり、偉人とならずんば置かず、と努力するにある。眞の聖人、英雄、偉人、には人から言つて貰ふ名なんか、爪の垢程も望みはしない。そして又、獨りよがりの虚威張りなんか、何んてするか。徒らに英雄崇拜を笑ふ人は、よくよく反省して貰ひたい。相對界に於ける結果と動機とは、切然と區別して思惟せねばならぬ。

カヴールが出なかつた時、果して伊太利の統一が、如何になり行いたか。西郷が居なかつたら、維新の難局は、どうなつたか馬鹿な事言ひよつて、維新の夫れよりも、益々難局に向ひつゝある向後の日本を、何うしようと言ふのか。宿命論(天命論)を、いゝ加減な處で片つけて了つては以ての外的事である。誰しもが、衆生の苦惱を一身に脊負ひ、一途に精進努力し、己れ内聖外王とならぬ限り安心は出来ぬ。

常住に良心と一如と居る事、此を儒教で「止至善」といふ。陽明子は「未發之中」に居ると言ふ。

善惡の觀念は對象を豫想して始めて言へる。それは丁度、點、其自身に何等方向の觀念なく、點を基點として、線を引いて始めて方向の觀念が、は入つて來るのと同様である。良知自身に終始する時、善惡の觀念はない。唯だに善惡の觀念のみか、時所

の觀念、更に我の觀念すらない。有るは唯、渾身の緊張丈だ。此處を老子は無我といふた。陽明子の彼の四句教の始め二句「無善無惡是心之本体。有善有惡是意之動」は正に此處を言つたのである。此の良知を常住に生き、常住に格物する處に人の道はあ
る。道に深潛し行くのも、此の持續が出来てからの後の事である。實在の把握は正しく、此處に在る。持續でも出來ず、斷續的
な、シドロ、モドロ、な生活をして居つて一言の吐く資格は、無い。黙れ！輕薄才子どもに限つて口數が多い。

自然は黙々として自然の道を歩いて居る。畑にある菜は、一言を發せず、黙々として道を体現している。時あつてか、紅焰沖
天にほとばしる蘇峯は、今靜かに、和はらかに雪に包まれて居る。金峯の彼方の白雲は悠々と身を天風に托して居る。何んと壯
嚴にして、和はらかき事か！總ては黙だ！一だ！

黙して道を行ふ事だ、黙して語る事だ。此の黙を離れてよりは、笑ふて白刃下に從容たる事も、命もいらぬ、名も、金もい
らぬ、眞個の偉丈夫になる事も、夫れは斷じて出來難い事である。

然らば吾人は如何にして眞個偉丈夫への修鍊を、せねばならぬか。修養に大体二つある。一は消極にして、他は積極である
婆羅門や修道院(?)の修行の如く、力を盡して、人間の私心や邪念を除去せんとする法と、他は陽明學や禪に於ける如く、徹
底して良知、本性に威嚴あらしむる可く努力する事に依りて、必然邪念、意馬を無力にする法とである。前者は、惡をも爲し得
ず、況んや、善をや、の弱虫たらしめる事は出來るかもしれぬ、だが眞人を鍛ひあげる事は出來ぬ、大丈夫、よろしく後者に依
りて鍛鍊せねばならぬ。

良知をして威嚴あらしむる爲には、畢竟、吾と吾が身に峻嚴に當たらねばならぬ。道行に於て、峻嚴の一事を缺かば、修養は
斷じて出來難いのである。道の爲には死を覺悟せねばならぬ。だが、此處に注意す可き事がある。峻嚴たる前に、先ず、我と吾
が中に全身を燒き盡し、萬物を燒かし盡さずんば止まざる一大悲願を見出さねばならぬ。徒らに峻嚴にやつた丈では、虎たらん
として猫たるにとゞまるかも知れぬ。盡きせざる悲願は常住に吾が身に峻嚴に當たるものである。懦弱なのは悲願が足らぬから
である此の悲願あつて始めて、衷心から敬虔の情も滲み出で、涙、滿腔に徹しこの愛も湧き出でる。

默行道の端、夫れは、正に一個の大悲願にある。

龍南、去るの日も近づいた。不肖の子は、時に、狐疑の目を以て見た事もあつた。そして、心に思つて居るのみか、そを、現實に示した事もあつた。それなのに、些々の異りもなく、何等厭む事もなく、此の僕を導き、勵まし、切磋して頂いた、兩師家、内外の諸恩師、兩三の先輩知己、更に吾が斷金の同志知己、夫等の方々に對し、實に、謝す語を持たぬそして僕は今更めて誓ふ。向後、僕から去る何物があらうとも、唯だ一の素心丈は！